『英語史研究会会報　研究ノート』2009 年, pp. 15-30.
Copyright © 2009 by Hiroshi Yonekura

Thomas Hardy の英語と文体

――その統語法と語形成――

米倉　綽

1. はじめに

Lodge (1984: 174) は“Thomas Hardy might be described as an ‘in-spite-of’ novelist.” と述べている。つまり、文学的にも言語的にも、欠点があるが、それでも英文学史上、偉大なる作家であるという。また、Hardy の死後（正確に言えば、彼の存命中）[1] に現れるいわゆるモダニズムの代表的作家のひとりである Virginia Woolf は彼女の「Hardy 論」(“The Novels of Thomas Hardy” (1966: 258))の中で “The novels … are full of inequalities; they are lumpish and dull and inexpressive; but they are never arid;” と述べ、彼の小説にはむらが多く、退屈で無表情であるとしながらも、「決してかさかさしていない」と評価している。さらに、言語的な面からみると、“He feels his way by dint of sagacity and uncompromising sincerity to the phrase he wants, and it is often of unforgettable pungency. Failing it, he will make do with any homely or clumsy or old-fashioned turn of speech, now of the utmost angularity, now of a bookish elaboration. No style in literature, …,

[1] Hardy は 1928 年に 87 歳で亡くなるが、James Joyce が *Ulysses* を発表したのは 1922 年、Virginia Woolf が *Mrs Dalloway* をあらわしたのが 1925 年である。なお、Hardy の作品、特に小説がなにゆえ批判されたかは杉村 (2005: 1-3) に詳しく論じられている。

is so difficult to analyse;" (1966: 265) だと指摘している。Hardy は自らがのぞむ語句を探しもとめ、時にその語句は忘れられないほど鋭いものである場合が多く、それが駄目な場合は、平凡な、古めかしい言い回しとなり、ある時はこのうえなく堅苦しい言い方になったり、またあるときは本から借りたような凝った表現を用いているので、文学上の文体でこれほど分析しにくいものはない、と Woolf はいうのである。

以上のように、Hardy の作品は文学的・言語的観点からみて、評価される部分と評価されないところが混在しているが、にもかかわらず ('in-spite-of')、英文学史上偉大なる作家と位置付けられている。また、言語の面からのみみると、Hardy は 1000 以上もの新語を創造している。[2] Elliott (1986: 171) も"Hardy's linguistic resourcefulness, like Shakespeare's, knew no bounds"と述べている。そこで、本小論では言語的観点、特にその統語法と語形成に着目して、Hardy の言語およびその文体の特徴を論述する。

2. 統語的特徴

Hardy の文構造はしばしば「ぎこちない」(clumsy)と批判される。例えば、次の例で明らかのように、主語が極めて長いのがその一つである。

(1) Either the change in the quality of the air from heavy to light, or the sense of being amid new scenes where there were no invidious eyes upon her, sent up her spirits wonderfully. (Tess 119 / 11-13)[3]

「重苦しい空気から軽やかな空気へと、空気の質が変化したためか、あるいは不快な目が彼女に注がれることのない新しい場所の中に居ると感じるためか、それが不思議なほどにテスの気持ちを高揚させた。」

---

[2] Goto (1967: 37-42) を参照。

[3] 引用テクストは Grindle and Gatrell (2005)である。数字は「テキストのページ / 行数」である。

(2) The midnight airs and gusts, moaning amongst the tightly-wrapped buds and bark of the winter twigs, were formulæ of bitter reproach. (Tess 97 / 24-25)

「冬の小枝の固く包まれたつぼみや樹皮の間でうなるような音をたてている真夜中の風や突風は、厳しい非難の表現であった。」

(1)では Either the change … no invidious eyes upon her が sent up の主語であり、(2) では The midnight airs … the winter twigs が were の主語となっている。この主語の部分には関係詞構文 (where there were no invidious eyes upon her) や分詞構文 (moaning among the tightly-wrapped buds and bark of the winter twigs) が埋め込まれており、構造そのものがさらに複雑になっている。

Hardy の関係詞の用法は、しばしば読者の理解を困難にするか、[4] 英文法上普通でない場合がある。[5]

(3) Having crossed the road he descended into a ravine, where **a cottage** revealed itself, **which** he entered. (Mayor 307 / 10-12)[6]

「道を横切って、彼は谷に降りていった。そして、そこに現れた小屋に入って行った。」

(4) But Elizabeth-Jane noticed that, though this filling went on with great promptness up and down the table, nobody filled the **mayor's** glass, **who** still drank large quantities of water from the tumbler behind the clump of crystal vessels intended for wine and spirits. (Mayor 33 / 35-39)

「大急ぎでテーブルを注ぎまわっていたが、誰も市長のグラスに注ご

---

[4] ただし、Sankey (1965: 4) は、Hardy は文を変化させているが、Dickens の *Great Expectations* の最初の箇所のように、読者の注意を乱すような文構造は用いていないと言っている。

[5] *The Mayor of Casterbridge* の文体については、Heilman (1964) に詳しく論じられている。

[6] 引用したテクストは Kramer (2004) である。

うとする者はいないことに、エリザベス＝ジェーンは気付いた。彼はあいかわらず、ぶどう酒やその他の酒のために用意された多くの透明のグラスのうしろにある大コップから、大量の水を飲んでいた。」

(3)では、関係副詞 where の先行詞は a ravine であり、もう一つの関係代名詞 which の先行詞は動詞句 revealed itself によって分離されている a cottage である。関係詞はできる限り先行詞の直後に置くべきであるが、この例では先行詞と関係詞が他の要素によって分離されている。さらに、(4) の場合は、関係代名詞 who の先行詞が属格 mayor's になっている。

また、次の例から明らかのように、分詞の用法に Hardy の英語の特異性がみられる。

(5) While they were **sitting**, the door of the council-chamber **standing** open, they heard a heavy footstep coming up the stairs. (Mayor 243 / 29-30)

「議場の扉を開けたままで、 彼らが座っていると、階段をのぼってくる重々しい足音が聞こえた。」

(6) The pen and all its relations being awkward tools in Henchard's hands he had affixed the seals without an impression, **it** never **occurring** to him that the efficacy of such a fastening depended on this. (Mayor 235 / 17-19)

「ヘンチャードは、ペンに関することはすべて不器用だったので、押印をせずに印章をした。こうした封印の効果が押印によっていることは、彼には思ってもいなかったことである。」

(5)では進行形の sitting と独立分詞構文の standing が並列的に用いられており、文体的には "awkward juxtaposition" と言うべき構造である。[7] さらに、 (6) の独立分詞構文の分詞 occurring の主語には it が使われている。このような構文で主語として it を多用しているのは Hardy の文体的特徴である。

---

[7] Heilman (1964: 310) を参照。

これまで述べてきたように、Hardy は現代英語の用法からかなりずれた統語構造を用いているが、このような文体的特徴はかなり意図的なものと考えられる。この事実は、次の引用のように、一つの出来事を説明するのに、現在時制と過去時制が使われていることからも明らかである。

(7) This had gone on for a month or two when there **came** a Saturday in September, on which a fair and a market **coincided**; and the pilgrims from Trantridge **sought** double delights at the inns on that account. Tess's occupations **made** her late in setting out, so that her comrades **reached** the town long before her. It **was** a fine September evening, just before sunset, when yellow lights **struggle** with blue shades in hair-like lines, and the atmosphere itself **forms** a prospect, without aid from more solid objects, except the innumerable winged insects that **dance** in it. Through this low-lit mistiness Tess **walked** leisurely along. (Tess 70 / 30-71 / 4)

「このようなことが 1，2 ヶ月続いた後の 9 月のある土曜日、縁日と定期市が同時にあったので、トラントリッジからの巡礼者たちは、そのような理由で、宿屋で二重の楽しみを求めた。テスは仕事のために、出かけるが遅くなったので、彼女の仲間の者たちは彼女より前に町に到着していた。天気のよい 9 月の夕暮れで、丁度日の沈む直前であった。黄色い光が青い影と戦って髪の毛のような線となり、大気そのものは、その中で舞い踊る無数の羽をもった虫のほかは、他の固形物の力を借りることなく、一つの風景を形作っていた。この薄明かりの霧の中を、テスはゆっくりと歩いて行った。」

この例では came, coincided, sought, made, reached, was と過去時制が続いたのちに、現在時制の struggle, forms, dance となり、最後にまた過去時制の walked が使われている。

過去の出来事を事実として過去時制で表現し、自然界にみられる現象を現在時制にすることで、読者を「過去から現実」へと導き、最後にまた過去時制を使うことで、時間という距離感を持たせよう

と Hardy は試みたのであろう。[8]

Hardy の英語の統語法についてはさらなる調査・分析が必要であるが、Hardy の言語で最も注目すべきは、その語形成にあると言われている。そこで、以下では、Hardy にみられる語形成の特徴を述べることとする。[9]

3. 語形成

Elliott (1974: 161)は、Chaucer が自らの英語を創造するために形態的構造(morphemic structure or morphemic pattern)を効果的に活用したと指摘しているが、このことは Hardy にもいえることである。[10] 特に、Hardy には古英語時代からの伝統的な英語の語形成パターンがみられる。[11] ただし、Chapman (1990: 76) は、Hardy は現代英語の語彙の形成に大きな貢献をしたと、いきすぎた評価がこれまでなされているが、決して新造語形成に顕著な寄与をしたのではなく、むしろ通常の文法的関係において、あるいは新しい複合語の創造において、予期せぬ方法で語と語を結合させたという点で注目に値すると述べている。そこで、以下では、派生語と複合語の形成に分けて、論述する。

3.1 Un-派生語

Hardy には接頭辞あるいは接尾辞を用いた語形成がしばしばみられる。 特に接頭辞 un- の使用は詩に多くみられる。

(8) Some one charm the world **unknows** (CP 111 Wives in the Sere)

---

[8] 清水 (1995: 208) を参照。このような時制の用い方については Chapman (1990: 108-109) でも論じられている。
[9] Elliott (1986: 171-254) および Chapman (1990: 76-93) を参照。
[10] Elliott (1986: 172) を参照。
[11] Elliott (1986: 172) を参照。

「世の人々が知らずにいる何かの魅力」[12]

(9) My Love keeps up his song, **Undreaming** it is so. (CP 208 The Husband's View)

「わたしの最愛の人はそれともしらず　まだ歌をうたい続けているんだわ。」

Un-派生語は確かに詩に多くみられるが、次の(10)で明らかなように、散文作品でも Hardy はこの派生語を好んで使用している。

(10) Perhaps it [=her present feeling] was **unusual** in the circumstances, **unlucky**, **unaccountable**; (Tess 94 / 1-2)

「おそらく、彼女の現在の気持ちは、このような状況においては珍しいものであり、不幸で、説明のできないものであった。」

接頭辞 un- の他にも、Hardy は否定を示す接頭辞や接尾辞をしばしば用いている。

(11) Tess did not stop at Weatherbury, after this long drive, further than to make a slight **nondescript** meal at noon, at a cottage to which the farmer recommended her. (Tess 117 / 30 - 118 / 2)

「この長い馬車での旅を終えると、テスはその農夫がすすめた田舎屋で、正体不明の食事をかるくとっただけで、それ以上はウェザベリーに留まらなかった。」

(12) he [=Jude] could perceive to be wearing an extraordinarily tall hat, a swallow-tailed coat, and a watch-chain that danced madly and threw around scintillations of sky-light as its owner swung along upon a pair of thin legs and **noiseless** boots. (Jude I.-iv. / 4-8)[13]

---

[12] 引用したテクストは Gibson (2001) である。CP は *The Complete Poems* を指す。また、日本語訳は森松 I (1995) による。
[13] 引用したテクストは Ingham (1985)である。なお、数字は「章 / 行数」

「ジュードは、とてつもなく高い帽子と燕尾服を着て、音のでない長靴をはいた細い足を勢いよく進めるたびに、針が踊り狂い、天空の光をきらきらとあたり一面に反射させている時計を身につけているのがわかった。」

(11) と (12) にみられるように、接頭辞 non- や接尾辞 -less を付加されている場合もあるが、Hardy の作品では un-派生語が圧倒的に多い。このように un-派生語が多くみられるのは Hardy の作品が悲劇的な内容であることの反映であろう。[14]

3.2　複合語

Hardy の複合語形成は Gerard Manley Hopkins の複合語の使用とよく似ていると言われている。しかも、この Hopkins の複合語形成が古英語詩の複合語の造語法と共通しているようである。[15] 次の Hopkins からの 1 例をみてみよう。

Blue-beating and **hoary-glow** height; or night still higher,
With belled fire and the **moth-soft Milky Way**,
(The Wreck of the Deutschland　26. 5-6)[16]

「青く鼓動し、白く輝く高い空、いや、夜はさらに高く、/　鐘のようなきらめきと蛾のようなやわらかな銀河とともに」

わずか 2 行の詩行において Blue-beating, hoary-glow, moth-soft, Milky

を示す。

[14] Elliott (1986: 188) を参照。なお、シェイクスピアも *King Lear* においてこの un-派生語を効果的に用いている。三幕 4 場までは現実を曲解しているリアを表すために un-派生語が多用されるが、これ以降はリアの知覚力が回復することを示すために un-派生語の使用を少なくしている ((Hussey 1982: 55-56) を参照)。また、Hardy 作品の悲劇性については杉村 (2005: 3-8) を参照。

[15] Elliott (1986: 172) および Chapman (1990: 76) を参照。

[16] 引用したテクストは Gardner and MacKenzie (1970)である。

Way の 4 つの複合語が用いられており、しかもこれらの複合語はすべて古英語あるいは古ノルド語起源の語から構成されている。これを Hardy の詩と比較してみよう。

> Icicles tag the **church-aisle** leads,
> The **flag-rope** gibbers hoarse,
> The **home-bound foot-folk** wrap their **snow-flaked** heads,
> (CP 439 The Five Students)

> 「つららが　教会側廊の屋根の鉛がわらを引っぱり / 旗の柱の綱がしゃがれ声で喋る / 家路をたどる人びとは雪片のふりかかる頭をくるむ」[17]

ここでは、5 つの複合語 church-aisle, flag-rope, home-bound, foot-folk, snow-flaked が用いられている。これらの複合語を構成している語のうちで、aisle は古フランス語、flag と 'flaked' は起源不詳であるが、それ以外の語はすべて古英語起源である。複合語のこのような使用は散文にもしばしばみられる。

> There were a few **middle-aged** and even **elderly women** in the train, their **silver-wiry** hair and wrinkled faces, scourged by time and trouble, having almost a grotesque, certainly a pathetic, appearance in such a jaunty situation. (Tess 20 / 1-4)

> 「行列のなかには、中年や初老の女性も数人いたが、歳月と苦労に悩まされたその銀の針金のような髪の毛としわのよった顔は、このような快活な場面では、ほとんど奇怪であり、また、確かに痛ましい光景にみえた。」

この例では middle-aged , elderly women , silver-wiry という複合語が使われているが、その構成要素はすべて古英語起源である。もちろん、次の例のように、フランス語起源からなる複合語もあるが、

---

[17] 日本語訳は森松 II (1995) による。

Hardy では古英語起源の構成要素が顕著である。

> Ideal and real clashed slightly as the sun lit up their figures against the green hedges and **creeper-laced house-fronts**;　(Tess 19 / 31)
>
> 「緑の生垣やつたかずらのからんだ家の前面を背景にして、太陽が彼らの姿を照らし出したとき、理想と現実が少し狂いだした。」

この例では creeper-laced と house-fronts の二つの複合語がみられるが、laced と fronts はフランス語起源の語である。さらに、以下の例のように、頭韻を踏んでいる複合語も使われている。

> She's brim-full of poetry— actualized poetry, if I may use the expression. She lives what **paper-poets** only write.　(Tess 182 / 6-7)
>
> 「彼女は詩に満ち溢れているのです。つまり、もしこのような言い方をすれば、詩の権化ですよ。彼女は紙の上の詩人が、ただ文字を書くことで生活しているんですよ。」

なお、この paper-poets という複合語は *OED* には記載されておらず、従って Hardy の新造語である。

このように、Hardy では複合語が頻繁に用いられているが、その複合語の型は様々である。つまり、複合語の第一要素（＝規程要素）も第二要素（＝被規程要素）も名詞、形容詞、副詞、前置詞、動詞などが使われている。ただ、動詞の場合は、現在 / 過去分詞であったり動名詞である場合がほとんどである。以下に、具体的な例をあげる。

> 複合名詞[18]
>
> N + N: rectory-house　(Jude I.-i / 8)

---

[18] 記号はそれぞれ、N=Noun, V=Verb, A=Adjective, Adv=Adverb, Ving1=Gerund, Ving2=Present Participle as Adjective, Ved=Past Participle as Adjective, Prep=Preposition, Aux=Auxiliary Verb を示す。

A + N: middle-distance　(Tess 18 / 28)
Ving1 + N: standing-places　(Mayor 7 / 29)
N's + N: bird's-eye　(Tess 118 / 38)

複合形容詞

Adv + Ved: a **newly-risen** sun　(Mayor 17 / 1)
Ved + A: the **blackened-green** stage of colour　(Mayor 6 / 29)
N + Ving2: For **sea-faring** natures be very good shelter　(Mayor 15 / 16)
Adv + A: she had the hard, **half-apathetic** expression　(Mayor 6 / 15)
Ved + Prep: the **undreamt-of** possibility　(Tess 343 / 39)
Aux + V: her **would-be** partner　(Tess 25 / 7)
A + Ved: on a **white-clothed** table　(Mayor 8 / 32)

最後にあげた'white-clothed'（白い布をかぶせた）の型は「A + Ved」であるが、この'clothed'は名詞の'cloth' をゼロ派生 (zero derivation) によって動詞化した語が過去分詞化されたものである。同様の例に white-faced (Tess 354 / 21), grey-bearded (Wessex Tales 71 / 11),[19] heavy-footed (Wessex Tales 78 / 29), hollow-backed (Wessex Tales 88 / 15), low-chimneyed (Wessx Tales 98 / 16) などがある。

Hardy に用いられている複合語の主な型は以上のようなものであるが、特徴的なのは複合形容詞が頻繁に用いられていることである。複合形容詞のなかでも第二要素が Ved （形容詞化した過去分詞）または Ving2（形容詞化した現在分詞）の場合であり、Wessex Tales だけでみても、約 50 例みられる。この型には叙述的 (predicative) なものと制限的 (attributive) なものがあるが、制限的に用いられている場合が圧倒的に多い。

叙述的な場合：

Sally was quite **light-hearted**,　(Wessex Tales 161 / 24)
she wanted to see if you was **good-looking**."　(Wessex Tales 170 / 13)

[19] 引用したテクストは King (2009) である。数字は「ページ数 / 行数」を示す。

制限的な場合：

as a **well-educated**, **liberal-minded** young man.
(Wessex Tales 87 / 3)
some guiding hand was necessary in the **sorrow-stricken** household,
(Wessex Tales 108 / 28)

Hardy の他の作品でも制限的用法の例が多い。これは、Hardy がこの制限的用法の複合形容詞を用いることで、統語的にみて、長い句(a longer phrase)を使うことを避けて、いわゆる“economy of diction”を実践したものと考えられる。[20] また、このような制限的用法は、a **golden-haired**, beaming, **mild-eyed**, godlike creature (Tess 99 / 10), a temporarily **light-hearted** man (Mayor 53 / 13), the pretty, **liquid-eyed**, **light-footed** young woman (Jude II.-iii, 94 / 4) にみられるように、Hardy の人間についての鋭い観察の表れであろう。

さらに、複合名詞も複合形容詞の場合も、特に Hardy の韻文では古英語の哀歌 (elegy) にみられると同じような使い方がされている。

I have watched her walking, riding,
Shade-flecked by a leafy tree,
Or in fixed thought abiding
By the **foam-fingered** sea.
In woodlands I have known her,
When boughs were mourning loud,
In the **rain-reek** she has shown her
Wild-haired and **watery-browed**.
And once or twice she has cast me
As she pomped along the street
Court-clad, ere quite she had passed me,
A glance from her **chariot-seat**. (CP 541 The Old Gown)

「私は彼女が　葉の茂る木のそばを　木漏れ日の縞模様を帯びて / あ

[20] Elliott (1986: 174) を参照。

るいは一つの思いに夢中になって / 波頭を指先のように泡立てる海辺を / あるいたり　馬に乗ったりして通るのを見たことがある / 森のなかでも私は彼女を見たことがある / 大枝という大枝が　大声で嘆いていたときだ / 煙るような雨のなかに / 彼女は　髪ふり乱し / 額に雨水を滴らせて　現れたこともあった / また　王宮への参列の服を着て、　華麗な姿で / 彼女が街路を進み、その馬車の座席から / まだ私のそばをすっかり通りすぎないうちに / 一、二度　彼女は私の方を見ていたこともあった」[21]

この詩では foam-fingered, rain-reek, Court-clad で明らかなように、頭韻を踏む複合語も用いられており、この点で Hardy は古英語の伝統を模倣していると考えられる。

Hardy には三重の複合語 (triple compound) が用いられている。このような複合語は散文、特に“informal narrative” でしばしばみられる。[22]

It was two hours, owing to sundry wrong turnings, ere she found herself on a summit commanding the **long-sought-for** vale,　(Tess 118 / 19-21)

「何度も道を間違えたため、久しくあこがれていた盆地を見渡すことのできる頂上へ彼女がたどりつくのに二時間かかった。」

It was not her hard taskmaster, Farmer Groby; it was one in a semi-clerical costume, who now represented what had once been the **free-and-easy**. (Tess 334 / 32-34)

「それは彼女の過酷な親方の農夫グロービーではなかった。半ば牧師の服装をした男で、以前はのん気でいい加減であった男の今の姿であった。」

The truth was that a certain shyness of revealing his conduct prevented Michael Henchard from following up the investigation with the loud

---

[21] 日本語訳は森松 II (1995) による。
[22] Elliott (1986: 177) を参照。

hue-and-cry such a pursuit demanded to render it effectual; (Mayor 19 / 8-11)

「実は、マイケル・ヘンチャードがやっているような追跡を効果的にするには、大声で探し回るべきであったが、彼の行為を明らかにしたくないというある種の恥ずかしさから、調査はすすまなかった。」

there's good sound information for **bide-at-homes** like we when such a man opens his mouth." (Mayor 52 / 3-4)

「そのようなかたが口を開かれると、我々のような家に閉じこもっている者には、いいことを聞かしてくださる。」

4. おわりに

Hardy の統語的特徴は、法副詞（句）といわれる possibly, no doubt, perhaps, plainly や評言節 (comment clause) のような that is to say, to tell the truth などもみられる。語形成では時間の概念を表す複合語 breath-while, tedious-timed, breathing-time, blight-time, bright-time, mirth-time, claytime, gnat and cobweb-time, song-time, pray-time, time-rail の多用も顕著である。これは Hardy が絶えず「時間」を意識している作家であったことを示している。[23] このことは次の引用にもあるように、'too late' という語句がしばしば使われていることでも明らかであろう。

We didn't know you was coming till we got your letter this morning ——when 'twas **too late**. (Tess 381 / 39- 382 / 1)

「あんたたちがやって来ることは、今朝、あんたの手紙を受け取って初めて知った。遅すぎたのだ。」

But it was **too late** to modify or postpone, and the proceedings went on. (Mayor 98 / 7-8)

---

[23] 福岡 (1995: 108-117) を参照。

「変更するにも延期するにも遅すぎた。行事は続けられた。」

Hardy はヴィクトリア朝から続いている厳しい階級制度や因襲――社会のありかたや人間のありかた――に拒否反応を示している一方で、神話、口伝えに受け継がれた彼の生まれ故郷ドーチェスターの迷信や伝説に強い関心を示す作家でもあった。このことは、すでに上で述べたように、古英語の頭韻詩を思わせる複合語の多用からも明らかであり、また *Wessex Tales* というタイトルはその内容や形式からも、Chaucer の *The Canterbury Tales* を連想するものである。[24]

Hardy の作品は内容も、その言語表現も「古さと新しさの混在」[25]したものであると言えよう。Hardy は執筆活動の中心を *Jude the Obscure* を最後に、小説から詩作へと移して行く。本小論では主に彼の小説の言語について論じ、小説と詩（詩劇といえる作品も含む）の言語を区別していないが、今後、散文と韻文に分けて、その言語の文体的特徴をさらに調査・分析する必要がある。そうすることによって、さらに Hardy の言語表現の「古さ(=古英語以来の伝統)と新しさ」を明らかにできるであろう。

参考文献

テクスト：

Gardner, W. H. and N. H. MacKenzie (eds.) (1970) *Poems of Gerard Manley Hopkins*. (Oxford Paperbacks), Oxford: Oxford Univ. Press.

Gibson, James (ed.) (2001) *Thomas Hardy: The Complete Poems*. London: Macmillan. [CP]

Grindel Juliet and Simon Gatrell (eds.) (2005) *Tess of the d'Urbervilles*. (Oxford World's Classics), Oxford: Oxford Univ. Press. [Tess]

Ingham, Patricia (ed.) (1985) *Jude the Obscure*. (The World's Classics), Oxford:

[24] 福岡 (1995: 143) を参照。

[25] Elliott (1986: 171) および福岡 (1995: 5) を参照。

Oxford Univ. Press. [Jude]
King, Kathryn R. (ed.) (2009) *Wessex Tales*. (Oxford World's Classics), Oxford: Oxford Univ. Press.
Kramer, Dale (ed.) (2004) *The Mayor of Casterbridge*. (Oxford World's Classics), Oxford: Oxford Univ. Press. [Mayor]

研究書・研究論文・辞書・訳著：

Chapman, Raymond (1990) *The Language of Thomas Hardy*. New York: St. Martin's Press.
Elliott, Ralph W. Victor (1974) *Chaucer's English*. London: Andre Deutsch.
Elliott, Ralph W. Victor (1986) *Thomas Hardy's English*. Oxford: Basil Blackwell.
福岡忠雄 (1995)『虚構の田園――ハーディの小説』京都：あぽろん社.
Goto, Yoshinoshin (1967) "Thomas Hardy Quoted in O.E.D. and E.D.D.," *Memoirs of Suzuka College of Technology* 1, pp. 37-42.
Heilman, Robert B. (1964) "Notes on Style," *Nineteenth-Century Fiction* 18, pp. 307-29.
Hussey, S. S. (1982) *The Literary Language of Shakespeare*. London and New York: Longman.
Lodge, David (1984) *Language of Fiction: Essays in Criticism and Verbal Analysis of the English Novel*. London and New York: Routledge and Kegan Paul.
森松健介（訳）『トマス・ハーディ　全詩集』I ＆ II、東京：中央大学出版部、1995.
Salter, C. H. (1973) "Unusual words beginning with *un, en, out, up* and *on* in Thomas Hardy's verse," *Victorian Poetry* 11, pp. 257-61.
Sankey, Benjamin (1965) "Hardy's Prose Style," *Twentieth Century Literature* 11, pp. 3-15.
清水緑 (1995) 「『テス』――時空間操作の統語構造」 十九世紀英文学研究会（編）『テス』についての 13 章』東京：英宝社, pp. 196-213.
Simpson, John A. and Edmund S. C. Weiner (prepared) (1989) *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition, Oxford: Clarendon Press (CD-ROM 3-1 Version). [OED]
杉村醇子 (2005) 「トマス・ハーディの後期小説の研究」 博士論文 (京都府立大学).
Woolf, Virginia (1966) "The Novels of Thomas Hardy," in *Collected Essays*, Vol. I, London: The Hogarth Press, pp. 256-66.